

グローバル経済下のインドにおけるローカルな空間の再編成に関する研究（要約）

澤 宗則

本稿の問題意識は、グローバル化の進行に伴い、先進工業国と開発途上国の関係が緊密になるなかで、開発途上国の地域変化をどのような枠組みで捉えたらよいかという点にある。本稿では開発途上国・インドの農村、および越境するインド系移民達の定住地といういずれもローカルな空間が、経済のグローバル化とどのように関わりつつ変化しているかに着目して考察を行った。

現在の経済のグローバル化の特徴には、開発途上国政府の工業化政策の下、先進工業国の資本により開発途上国の大都市や新興工業団地が工業製品の生産拠点となっている点と、開発途上国から先進工業国へと越境する移民の流れが大きくなるとともに、先進国で成功した移民達が出身国に投資を行うなど、移民の属性が多様化し、開発途上国から先進工業国への単純労働者の移動という一方向だけの概念ではすでに捉えきれなくなった点があげられる。いずれも、人・モノ・情報と金融資本のみならず、生産資本の国境を越えた流動がきわめて大きくなったことにより特徴付けられる。これらは、国家のみならず、都市・農村など、あらゆる地域のあり方を大きく変化させ、空間に再編成をもたらす原動力となっているといえる。

グローバルな変化は、確かに資本の論理による生産空間の地域的展開のみならず、ナショナルスケールでは国家経済政策と関わり、これらがリージョナルスケールでの地方政府の地域政策と関わりながら、下位のローカルスケールでの地域変化に至るまで大きく関わっている。しかし重要なことは、ローカルな空間は上位の空間スケールにより一方的に規定された従属的なものではなく、いわんや上位の空間スケールの変化により等質化されるものでは決してないという点である。この論点において、人文地理学が実証的に解明しなければならないことの一つは、経済のグローバル化が、空間の統合化のみならず、差異化(地域分化)をも推進する様式を明らかにすることであると筆者は考える。つまり、下位スケールの空間は、空間の上位スケールへの統合がすすむほど、統合され

た空間のなかでの生き残りのため個々の条件にあわせた機能特化をせまられる。そのため、ローカルスケールの農村の社会・経済システムを考察する際に、上位の空間スケールの社会・経済システムとの相互作用の考察が重要となる。

以上の問題意識のもと、本稿はグローバル化経済の影響を最も受けている開発途上国の一つであるインドを対象とした。インドは経済自由化が進められた1980年代以降、特に1991年の新経済政策への転換以降、先進国からの外資導入により急激な経済成長を経験した。これは先進国を頂点としたグローバル化経済に、インドが組み込まれつつあると考えることができる。これらの現象は経済のグローバル化による空間の再編成と不可分な関係にあると考えられ、インドは経済のグローバル化と開発途上国の都市や農村の関係、さらに先進工業国における移民の定住地の形成の分析に適しているといえる。本稿において経済自由化以降のインド農村の変化と先進国におけるインド系移民の定住地の形成を、経済のグローバル化による空間の再編成の一環ととらえた。

空間スケール間の相互関係や、空間の独自性を考察する上で脱領域化と再領域化の概念が重要であることが確認できた。それはGiddens(1990)の近代性に関する社会理論を援用した、脱領域化と再領域化の概念である。ギデنزはグローバル化を「ある場所で生じる事象が、はるか遠く離れたところで生じた事件によって方向づけられたり、逆に、ある場所で生じた事件がはるか遠く離れた場所で生ずる事象を方向づけたりしていくというかたちで、遠く隔たった地域を相互に結びつけていく、そうした世界規模の社会関係が強まっていくこと」と定義している。さらにギデنزは、グローバル化を「近代性の帰結」としてとらえており、これはグローバル化とは近代性のグローバルな拡大であり、グローバル化を理解する上で近代性の視点は重要な枠組みを与えたとの主張である。

しかしこのような脱埋め込みと同時に、再埋め込み(脱埋め込みを達成した社会関係が、いかにローカル固有な文脈なもの、あるいは一時的なかたちのものであっても、時間的、空間的に限定された状況のなかで、再度充ち利用されたり、作り直されたりする)のプロセスが生じる。ローカルな文脈が他地域との関連性のなかで新たな意味を持ち、再び強化されることも生じる。この脱埋め込みと再埋め込みの過程の中で、ローカ

ルな空間が脱領域化かつ再領域化される。

本稿では空間の階層性に配慮し、脱領域化および再領域化を再定義する。すなわち、ナショナル、リージョナル、ローカルの各空間スケール固有な脈絡に結びつけられていた時間と空間が、上位空間スケールとの関係の中で、各空間スケール固有な文脈から脱埋め込みによって切り離されるが、同時に各空間スケール固有の文脈に再埋め込みされながら再構築される。この過程の中で、各スケールの空間が脱領域化かつ再領域化される。

以上を踏まえて、本稿では空間スケールの階層性に留意して、インドのナショナル、リージョナル、ローカルの3つのスケールにおける空間が、グローバル化した世界に組み込まれながら、再編成される過程を考察した。本稿の目的は、まず①グローバル化のもとの空間の再編成に関するアプローチに関して、ギデンズの近代性に関する社会理論を援用した、脱領域化と再領域化の概念の有効性を検討することである。そしてその有効性を踏まえて、②グローバル化の進行とともに脱領域化と再領域化は進むことを、インド農村の変化やインド系移民の集住地の形成に関する事例研究を通じて明らかにすることである。

まず、インドの経済政策と主な産業との関連性や産業集積との関連を分析した。次に、グローバル化の影響が少ない都市圏外農村を対照項として、ベンガルールとデリーの両大都市圏内の近郊農村とマディヤプラデーシュ州の新興工業団地に近接した農村を事例に、グローバル化の過程を考察した。さらに、先進国へと越境したインド移民の集住地の形成の過程をグローバルシティ・東京を事例に考察を行った。その結果、以下のことが明らかとなった。

新経済政策以降、インドへの外資の流動性が高まり、工業化への投資が積極的に行われた。その結果、自動車産業とIT産業が急成長し、欧米・日本を中心としたグローバル化経済にインドが組み込まれている。ナショナルスケールの脱領域化は、インドへの外資・労働力・情報の流動性が高まり、国家の枠組みが緩くなることによってもたらされる。これに対して、外資誘致のためのインド政府による金融市場・労働市場・インフラ整備政策により、必然的にナショナルスケールでの再領域化が生じる。輸送機関の高速化とITの発展、および立地規制の政策的緩和により、空間的障壁が重要でなくなるにつれ、工場やオフィスに関する立地条件

に関してリージョナルスケールでの脱領域化が進む。これに応じて、外資をめぐるインド国内での都市間競争が高まり、リージョナルスケールでの再領域化が必然的に進む。外資の誘致に成功した大都市の郊外や都市近郊農村では、グローバル化によって独自の景観や伝統・歴史といったローカルな文脈に埋め込まれた「場所」が剥ぎ取られ、上位の空間における経済的価値によって新しい意味づけをされながら、ローカルスケールでの脱領域化が進行する。同時にその変化のプロセスそのものがローカルな文脈に再び埋め込まれる中で、都市郊外や近郊農村の再領域化が不可避的に進む。

グローバル化経済は、先進国での労働市場の国境を越えた拡大をもたらし、開発途上国からの移民を増大させた。労働力の流動性の高まりによってもたらされた労働市場の脱領域化は、移民間および移民と出身地間の情報の流動性を高めた。それは、移民によるインドへの送金やインドへの出資や出身地などでの起業という形で、資本の流動性を高めることにつながっている。先進国に定住し始めた移民は、生活空間としての定住地を必要としている。移民が増大するに従い、彼らの文化に再び埋め込まれた集住地の形成という形で、ローカルな空間の再領域化が進むのである。このように移民の空間では、流動性を示す脱領域化とローカルな文脈に根ざした再領域化が同時に進行している。

グローバル化とは、近代性の帰結として、時間一空間の圧縮を加速度的に推し進め、社会的行為を上位の空間の中に位置付けることにより、空間の脱領域化と再領域化をやすみなく続けることである。これらの過程を通じて、ナショナル、リージョナル、ローカルの各スケールの空間はグローバルな空間に次第に組み込まれてゆく。